

秘化された象徴論・宗教言語論を宗教研究に敷衍する試みも、N・フランケンベリーやH・ペンナーらによってなされている。今日なお、「世界を宗教的に見る」ことは可能であり現実でもある。ただ、それは「宗教的関心を持って世界を見る」こと以上を意味しないのであれば、他者からの「介入」を原理的に阻むものでもなく、また、言語的に支えられる内的同一性を保証するものでもない。ただ、これは言語という支えを喪失した「宗教の揺らぎ」を意味するものでもない。それは一方では、グローバル化社会がすでに不可避の現実となった現在、言語相対主義的な相互不可侵的な「倫理」を超え、他者への寛容と尊重の念を持つて共に共生を目指す宗教の在り方、そして他方では、他の文化領域から隔絶された自閉的な宗教の自画像を超え、時代の中で絶えず生成していく創造的な宗教像を描く希望をも意味するものであろう。

クリアーヌの思想における

反ソヴィエト的「宗教」

奥山史亮

本発表は、社会主義国家ルーマニアを亡命した宗教学者であるヨアン・ペトル・クリアーヌにとって、宗教が普遍的な広がりを持つ(有するべき)と論じることはソヴィエトやルーマニアの社会主義政権が創り出す文化価値に抗する目的を有していたのではないかという仮説を提示する。そして、この仮説の

妥当性を検討するために、亡命者組織の機関誌に掲載されたクリアーヌの政治的論説の内容を整理し、宗教理論と照らし合わせる作業を行なう。クリアーヌは、一九八九年一二月のチャウシェスク政権の崩壊から一九九一年五月の死までの期間、およそ三〇編の論説を発表して、「革命」がチャウシェスク政権内のクーデターであったことや「革命」へのソヴィエトの関与などを主張した。「死者たちの対話」は一九九〇年六月に『自由なる世界』に掲載された論説であり、革命後に政権を掌握した救国戦線のリーダー、イオン・イリエスクと処刑されたニコラエ・チャウシェスクの亡霊がKGBの仲介によって対談を行なうという形式で書かれている。この対談では、イリエスク率いる暫定政権はソヴィエトからの支援のもとチャウシェスク体制を忠実に継承していることが強調されている。さらに、一九九〇年九月に『自由なる世界』に掲載された「空想科学政治」には、ソヴィエトやルーマニアの政治動向についてのクリアーヌの見解がSF的な論調によって示されている。クリアーヌによれば、KGBの長であるユーリ・アンドロポフは、政治上の問題に関して、ありとあらゆる選択肢と、その選択肢が導き出す結果とを瞬時に示すことができるというスーパーコンピューターによって、社会主義が状況によってどのように展開するのかわりにの実験を行なった。その実験に使われた場所が、ルーマニアやハンガリー、ポーランドといったソヴィエトの衛星国家であった。アンドロポフは、社会主義体制がしかれたそれぞれの衛星国家を平行世界とみなした。そして、それぞれの傀儡政権に対して、スーパーコンピューターの選択肢にそって異な

る政策と支援を施すことにより、様々なタイプの社会主義の平行世界を作り出したのだという。

SFともみなせるクリアーヌのこのような見解は、世界の在り方に関わる無数の選択肢とその無数の選択肢に接触できる場所・手段(ハスパーコンピューター)を示していた点において、『グノーシスの樹』で示された宗教理論と符号すると思われる。本書の斬新性は、「思想体」(ideal objects)という概念を用いた点にある。思想体とは人間の全ての思考パターンを含む超次元的な仮定的存在物であり、人間が有する思想は全て思想体由来する。様々な思想は思想体から二者択一的な選択肢のかたちをとって派生し、これら選択肢の全ては思想体において共時的に存在するとクリアーヌは考えた。歴史上の個々の宗教現象は、思想体を示す選択肢の一つをあらわすことができのみである。しかし思想体そのものに接触できれば、過去に起ったことから未来に起こることまでを共時的に把握することが可能になるといえる。この思想体という考え方は、ある命題に関する選択肢の数を強制的に減らそうとする社会や国家に抗するものだといえる。クリアーヌが明らかにしようと試みた思想体としての宗教は、スパーコンピューターによってKGBが描いた(とクリアーヌが考えた)シナリオでは欠けていた一面を補うものとみなせる。すなわち、「宗教」を抑圧するか否かという二者択一において、ソヴェイトとその傀儡国家は抑圧する世界を選択した。それに対してクリアーヌは、抑圧しないという選択をして、思想体としての宗教の広大な広がりを見事にしようとしたこととなる。「空想科学政治」を読んでいた

人間が思想体に関する論述を読んだ場合、それはソヴェイトやルーマニアによって選り取られた二者択一に抗する選択肢の体系をクリアーヌが描こうとしたと解釈できたであろう。

宗教学と科学

——I. P. Culianu の場合——

佐々木 啓

近年、認知科学的宗教研究、すなわち「宗教」についての実験心理学的・進化生物学的などといわれる研究が流行りである。この認知科学的宗教研究の方向性が正しいとするならば、狭義の「宗教学」はそれに解消されてしまうかもしれない。最も「宗教学者」らしい「宗教学者」であるM. Eliadeの基本前提は、「宗教現象」なるものの固有性と、それを研究する際の方法の固有性の主張に他ならない。しかし、認知科学的宗教研究は、まさしく「宗教現象」なるものの固有性を剥奪するところから始まる。そのような認知科学的宗教研究に真っ向から対立するのが、EliadeやI. P. Culianuといった「宗教学者」たちである。

Culianu の研究者としての人生は二〇年ほどにしかならないが、彼の方法的変遷には看過できないものがある。例えば、Culianu 最後の学術書とも言われる『The Tree of Gnosis』は、そのフランス語原典たる *Les gnosés dualistes d'Occident* に類繁に見られる人類学的議論がばつさりと切り捨てられている。また Culianu は、彼の研究活動のごく初期に書いた文書